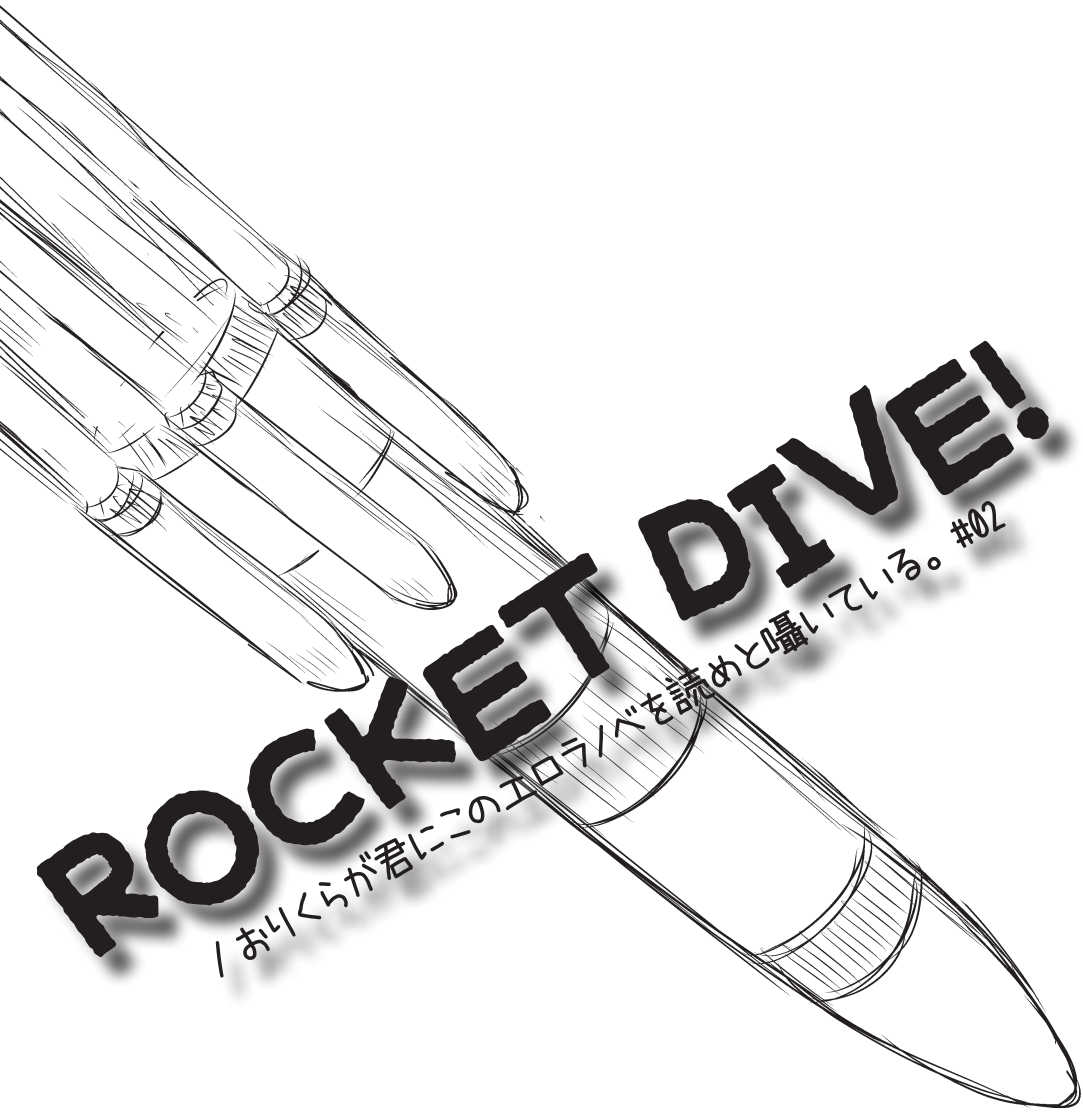

ROCKET DIVE!

／おりくらが君にこのエロラノベを読めと囁いている。#02

■まえがき　または私は如何にして「大熊狸喜の短編エロラノベ」を紹介する本の製作を思い立ったか

別の短編エロラノベのレーベルを暫く追いかけていた経緯などから、短編の狭い枠の中で、特異な世界観の説明とか、不思議な現象やガジェットの解説なんかに血道を上げてるエロラノベっていうものを、昨今、目にする機会が割と多かったワケです。

結果、物語的な整合の点に関しては確かに頑張った成果があると思えるものの、エロいかどうかって話でいうと別にエロくはないよねコレ、という評点にせざるを得なかった本も多くあり、あれらに足りないものは一体何だったのだろう、ということについて考える機会もまた多くありました。

ざっくり分類すれば「二次元ぷち文庫」というのも短編のレーベルで。

その中の大熊狸喜作品に触れたきっかけは、まあ、ほとんど偶然みたいなものだったんですが、読んでいて思うのは……確かに、宇宙戦艦が舞台の短編エロラノベを買った僕らの興味は「銀河西暦3456年における人類の版図」について知ることにはないし、陰惨な祭事に纏わる秘密が保たれた山間の小村を描くエロラノベに僕らが求めたいものは「特異な自然現象やその原因とされる物質に関する科学的分析や考察」ではないし、同い年で幼なじみのくノ一たちに主人公が迫られるエロラノベを開いて僕らが考えることは「引っ越したら両隣が忍者屋敷で、両方の家の末子である同い年の女の子と仲良くなる、という事象が実際に起きる確率」とかではないですよね、ということで。

一言で纏めると、それは『「そこの尤もらしさを追いかけても別に話がエロくならない」ことは深追いしない』を徹底する姿勢であって、それが「あれらに足りないもの」のひとつではなかったろうか、という結論に達しました。

とにかく「もっとエロくする」ことに向けた取捨選択の適切さ、場合によっては豪快さ、みたいな部分は本当すげえと思いましたし、「短編エロラノベをもっとエロくする」ことに関して、この極端な構成はヒントのひとつになり得るんじゃないかなあ、と。

そんなようなアプローチから、今回は「二次元ぷち文庫」の大熊狸喜作品を3冊取り上げてみたいと思います。

4：

■大熊狸喜/恋河ミノル「女艦長シュリア」
キルタイムコミュニケーション/二次元ぷち文庫
324円（税込み）
http://ktcom.jp/shop/products/detail.php?product_id=2674

二次元ぷち文庫の大熊狸喜作品だと、最初に読んだのはこれ。
その前というか、買った時点でそれ以外に読んでいたのが**「姦落の巫女姉妹」**全3巻、**「猟辱島　スレイブハンティング」**、**「星騎士少女キラジェム・ナイツ　悪夢の十三日姦」**といったワンポイント大逆転付きの凌辱長編だったので、短編もそんな感じなのかなと思い、ちょうど凌辱モノにしか見えない表紙とタイトルのぷち文庫が来たのを買ってみた感じ。
ちなみに先日知ったんだけど、この「ワンポイント大逆転付きの凌辱」作品カテゴリのことを「二次元エンド」と総称するらしい。キルタイムの「二次元〇〇」レーベルに多く見られるパターンだから、ってことのようなんだけど、僕はそんなこと知らなかったので、こういうのはレーベルが云々とかの話じゃなくて「大熊狸喜の必殺技」なんだとずっと思っていた。
さらに一点付け加えるとその**「星騎士少女キラジェム・ナイツ　悪夢の十三日姦」**は、「二次元エンド」的なパターンに即した大ピンチからの大逆転で大団円、のところで一旦話を閉じていながら、後日談でさらにもう一回ひっくり返して、傍目には冥く無惨な日常への回帰を描いて幕を引くという、「二次元エンド」のさらに亜種みたいなジェットコースター乱高下っぷりがすごいんだけど、まあ今回はその話はいいとして。

艦長でありヒロインのシュリアは登場時点で既に全裸であることが冒頭4行目でわかり、5行目から6行目にかけてで「大きく実った二つのバストがたっぷんと揺れ」、9行目で「全裸に首輪だけを着け」た状態であることが語られ、で、彼女がどういう境遇にあるためにいきなり全裸スタートなのか、の説明はそれ以降。という順序の導入って、これはなかなかのロケットスタートなんではなかろうか。
冒頭といえば、本文1行目がいきなり

> ――銀河西暦三千四百五十六年　七月八日――

という……この『や、ここは「未来です」がアピールできれば他のことは何でもいいんで、そーいうの特に設定煮詰めたりしてないですけど別に問題ないですよね？』感たるや。前から順に数字並べただけじゃねえかコレ。

他にも、舞台が航行中の宇宙戦艦であることは「被害者のシュリア1人とその他全員の凌辱者を逃げ場のない密室に閉じ込めておく」ためにそうなっている、くらいのことで、内容のほとんどを占める彼女への凌辱シーンに「そこが宇宙船だからこそ」なシチュエーションとかは特にない。似たような間取りの建物があれば、地球上のどこかであっても同じことが全部できる筈。

実家の家柄の話、シュリア自身に備わった類稀なる指揮能力の話などは、彼女が「本来このように虐げられる謂れのない女性」であることを強調するためであり、そんな彼女が地獄のような環境の中で惨めに犯され続ける理不尽さを強調するため。

「敵がいる」設定も多分、シュリアの首にずっと填められている便利アイテムとしての首輪の出自に関する説明を「敵性技術です」の一言で片付けるためのものだと思う。とはいえラストで実際に襲撃されるシーンがあるので敵の存在そのものが狂言ってことはないというか、この物語の構造で敵の存在が狂言だったらオチがああなのは本末転倒なんであって、作劇上の要請で適当に付け足したように思える要素も上手く使いこなされてるなあ、という印象。

で、もう説明は全部済みましたとばかり、あとはひたすらヒロインが恥辱の限りを尽くされるだけのお話。

50ページしか本文がないので、このお話でやりたいこと「以外の何か」に字数を割いてる余裕とかないです、という作者の気概が滲み出ていて、僕個人的にはこの姿勢には好感を持っている。それでは「やりたいこと」とは何なのかっていえば、もちろんそれは「その他全員に慰み者にされる女艦長シュリアを描く」ことに決まっているのだった。

そして、ここまで散々好き放題しておいて、最後の最後に突如驚愕のオチが付くんだけど……そんなに高いものじゃないんだし、このオチがどういうものかは読んで確認して欲しい。

開いた口が塞がらないというか、外れた顎が帰って来ない感じで、僕は大好きなんだけど、人によっては怒るかも知れなくて……怒っちゃうタイプの人は、この機会に**「故郷の奇祭」**の方も是非。